オープニングメッセージ

スクリプター・脚本家
あきた十文字映画祭顧問
白鳥 あかね
しらとりあかね

「映画祭よ永遠に！」

十文字映画祭開幕おめでとう！

「雪の降るまち」に手さぐりで生まれた映画祭も今では立派に成長を遂げました。舞台裏を支えるボランティアは勿論ですが、長靴をはいて公民館に集まる地元の方々の姿にいつも胸が熱くなるのは私だけでしょうか？

末永く見守り続けたいと願っています。

プロフィール

(協)日本シナリオ作家協会常務理事。脚本家・スクリプターとして50年以上映画界で活躍。元日活在籍。新藤兼人監督、神代辰巳監督、今村昌平監督、根岸吉太郎監督らの作品に携わる。『隠し妻』、『鍵』、『折り梅』などの脚本を執筆。

2004年文化庁映画功労賞、2010年川崎市文化賞を受賞。あきた十文字映画祭顧問、川崎市アートセンター映画・映像事業企画・作品選定委員、東京フィルメックス(2010年)審査員。

『脇役物語』(緒形篤監督と共作)では、キャスティングプロデューサーも兼任。2011年、KAWASAKIしんゆり映画祭代表に就任。2014年には「スクリプターはストリッパーではありません」を出版。同年、日本アカデミー賞特別賞を受賞。

脚本家・監督
あきた十文字映画祭顧問
荒井 晴彦
あらいはるひこ

戦争の悲惨さが描かれてない、戦争中なのにあんなことをしているのは非国民ではないのか、古臭い感じのする変な日本語だ、若い人（だと思う）がツイッターで言っていた。

空襲下なのに恐怖感が薄い、日本では戦争中なのにあんなキレイな服を着ていたのか、と北京電影学院の学生たちは言い、私の戦争が始まるのだという字幕に笑いが起きた。神社のシーンでの笑いは日本でもニューヨークでも北京でも同じだった。占領されたら男は去勢され、女は強姦されるという台詞に笑ったのはアメリカ人。そんな事するわけないよ、だろう。しかし、大きな男や黒い男による強姦事件は頻発した。字幕への笑いはショックだった。何故と訊いたら、奥さんが帰ってくるから戦争だなんて、そんな小さなことを戦争とは言わないと中国の若者は言った。私の、が付いてるだろ、私のことにこだわっていれば、国と国とのバカな戦争なんか起きないんだよ、と俺は語気を荒げた。

プロフィール

1947年東京都生まれ。季刊『映画芸術』編集・発行人。日本映画大学教授。若松プロの助監督を経て、1977年脚本家としてデビュー。キネマ旬報脚本賞を『Wの悲劇』（澤井信一郎監督、1984）、『リボルバー』（藤田敏八監督、1988）、『ヴァイブレータ』（廣木隆一監督、2003）、『大鹿村騒動記』（阪本順治監督、2011）、『共喰い』(青山真治監督、2013)で受賞。橋本忍に並んで最多受賞となる。他に『赫い髪の女』（神代辰巳監督、1979）、『遠雷』（根岸吉太郎監督、1981）、『海を感じる時』（安藤尋監督、2014）、『さよなら歌舞伎町』（廣木隆一監督、2015）。『身も心も』（1997）で初監督。著書に「昭和の劇 映画脚本家 笠原和夫」「争議あり 脚本家・荒井晴彦 全映画論集」「嘘の色、本当の色　脚本家 荒井晴彦の仕事」がある。

俳　優
あきた十文字映画祭顧問
永島　敏行
ながしまとしゆき

十文字映画祭25周年おめでとうございます。25年も続いたんですね。映画祭をはじめるきっかけは小川孝行さんと私の大学の同級生の藤原正樹くんが「レンタルビデオに押されて映画館が無くなってしまい、せめて年に一度でも町の人たちに大きなスクリーンで映画を観せたい」と相談されたのがきっかけです。25年の月日はビデオからDVDへ、DVDからネット配信へ、映画館はシネコンにと目まぐるしく変化してきました。しかし時代が変わっても映画は人の情熱が創り上げる。人の情熱、エネルギーがスクリーンから溢れる映画が上映される映画祭であって欲しいですね。

プロフィール

1956年千葉県生まれ。1977年「ドカベン」で映画デビュー。翌年「サード」「事件」「帰らざる日々」と次々に主演し同年の新人賞を総なめ。81年「遠雷」では根岸吉太郎監督と共にブルーリボン賞受賞。91年の映画祭発足以降はアドバイザーとして映画祭を支える。都市と地方の橋渡し役をライフワークとしている。03年十文字町特別功労賞受賞。最近の主な出演映画は04年「透光の樹」09年「わたし出すわ」10年「ゴールデンスランバー」11年「HESOMORI -ヘソモリ-」「花子の日記－ビーフのキョーフ物語－」13年「真夏の方程式」15年 映画「海難1890」、「愛を語れば変態ですか」等。秋田テレビ「永島敏行の農業バンザイ！すごいぞ秋田の農業」にレギュラー出演中。

2013年より秋田県立大学客員教授。

映画評論家・プロデューサー
あきた十文字映画祭顧問
寺脇　研
てらわきけん

十文字映画祭も25回、わたしは23回目の参加だ。日本映画を応援してくれるこの映画祭の実行委員たちと共に映画を語ってきた。最初は映画評論家として。そして今は映画プロデューサーとして作品を持って来る立場となった。自身で映画を作ろうと思うようになったのも、寒く雪深いこの映画祭での熱い映画談義を重ねてきた結果である。さて、今年の映画祭ではどんな議論ができるか、参加者の皆さんとお目にかかるのを楽しみにしています。

プロフィール

1952年、福岡県生まれ。高校在学中から「キネマ旬報」の「読者の映画評」に投稿。東京大学法学部在学中から『キネマ旬報』「読者の映画評」欄の常連だった。卒業後、文部省に入省。文部科学省在職時代から、日本映画映像文化振興センター副理事長に就任している。退官後の2007年から京都造形芸術大学芸術学部映画学科教授。2011年からは同大学芸術学部マンガ学科教授。「戦争と一人の女」(13)をプロデュース。著書に、『それでも、ゆとり教育は間違っていない』『韓国映画ベスト100』『官僚批判』『ロマンポルノの時代』『文部科学省「三流官庁」の知られざる素顔』などがある。

監督
東北芸術工科大学
映像学科長
林　海象　はやし かいぞう

「あきた十文字映画祭によせて」

東北芸術工科大学 映像学科の卒業作品をセレクトしました、林海象です。根岸吉太郎監督から引き継いで、十文字映画祭には初めて参加させて頂きます。今年の卒業制作は去年にも増して強力な作品が揃いました。確実に消滅するであろう日本映画界に対して、崩壊後に未来を構築していく若者たちの作品をご覧ください。学生たちと共に山形で撮りました、私の短編「GOOD YEAR」も崩壊する日本映画側として上映させて頂きます。世代の新旧をお楽しみください。

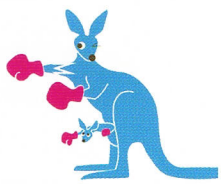
プロフィール

1957年京都府生まれ。映画を独学で学び、1985年「夢みるように眠りたい」で監督デビュー。1990年「二十世紀少年読本」「ZIPANG」を渋谷単館劇場と東宝で同時公開。1993年～1995年「私立探偵 濱マイク三部作」を発表し、当時の単館系興行記録を塗り替える。2002年「探偵事務所5シリーズ」製作開始。劇場版3本「楽園/失楽園」「カインとアベル」「THE CODE～暗号」短編50本が製作された。2007年京都造形芸術大学で映画学科を設立、初代学科長となる。2013年新世紀映画「彌勒 MIROKU」を発表し、生演奏付で全国を巡業する。2014年東北芸術工科大学 映像学科長に就任。新作は短編映画「GOOD YEAR」。

映画革命家である。

祝！開催
十文字映画祭を応援する……
待っていました！十文字映画祭
継続は力なり。いつまでも応援します。
TOM
株式会社トータルオフィスマネージメント
TEL (0182)42-4030
ホームページ http://www.toming.co.jp

各種折詰/皿盛/仕出し
ごとう
後藤龍男
十文字町本町22
TEL 0182-42-0248
42-2339(自宅)



当店の部分を切り取ってご来店すると
有効期限 平成28年3月31日まで
ぎょうざ無料（一人前）
●お一人様一枚に限らせていただきます
〒019-0522 十文字町梨木字西上51-5
TEL・FAX 0182(42)0342
営業時間 11:00～25:00 年中無休
ラーメン めん丸 十文字店

十割そばの店「そば正五郎」営業中
村さ来ランチタイム（11:00～15:00）
ゆるりと菜村さ来 十文字店 そば共通 TEL 0182-42-0099
カラオケ BeerBar ReMIX 村さ来隣 TEL0182-42-4477
予約センター案内 ●～PM3:00 までのご予約は 各店共通 TEL（0182）24－1400

http://www.akita-jcf.net/
十文字映画祭 検索 Click!